

一、次の話を読みながら、へかっこ内の助詞や接続詞の正しいと思われる方に丸をつけなさい。

『鼻』 はな
芥川龍之介 あくたがわりゆうのすけ

禅智内供 ぜんちないぐ へ鼻 を と云え、池の尾 いけのお へ知らない者はな

い。長さ は へ五六寸あつて上唇の上から顎 あご へ下まで

下 さが っている。形 は へ元も先 もとさき へ同じように太い。云 い わば

細長い腸詰 ちようづ めのような物 が へ、ぶらり に へ顔のまん中か

らぶら下っているのである。

五十歳 さい へ越 こ えた内供 は へ、沙弥 しゃみ の昔 むかし から、内道場供 ないどうじよう

奉 ぐぶ へ職 しよく に陞 のぼ った今日 こんにち へ、内心 ないしん では始終 しじゆう この鼻 を の

へ苦 く に病 や んで来た。勿論 もちろん 表面 より へ、今でもさほど気 に が

へならないような顔 で へしてすましている。これは専念 せんねん に

当来 とうらい の浄土 じやうど を渴仰 かつごう すべき僧侶 そうりよ の身 を へ、鼻 しんぱい の心配 を へとす

解答は次ページ

るのが悪いと思つた^{わる}へ^{から}ばかりではない。へ^{だから}それよりへ

むしろ、自分へ^で鼻を^{はな}氣にしていると云う事へ^と、人に

知られるのへ^と嫌^{いや}だつたからである。内供は日常へ^{にちじよう}のへ^{だん}談

話の中へ^に、鼻と云う語が出て来るのを何よりへ^で惧^{おそ}れ

ていた。

内供へ^に鼻を持てあました理由は二つある。――一つ

へ^で實際的に、鼻へ^の長いのが不便^{ふべん}だつたからである。

第一飯へ^を食う時にも独り^{ひと}でへ^を食えない。独りで食え

ば、鼻の先へ^を碗^{わん}の中の飯へとどいてしまう。へ^{そこで}しかしへ

内供は弟子へ^の一人を膳^{ぜん}の向うへ^{むこ}へ^{すわ}坐らせて、飯へ^に

食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりへ^で板で、鼻を持上げ

ていて貰^{もら}う事にした。へ^{だから}しかしへ^{しかし}こうして飯を食うと

云う事（はに）、持上げて（もちあげ）いる弟子（でし）にとつて（で）、持上げら

れている内供（ないぐを）にとつても、決して容易（ようい）な事ではない。一

度この弟子（の）と（かわ）代りをした中童子（ちゅうどうじ）に（に）、噓（くさめ）をした拍子（ひょうし）

と（と）に（に）手がふるえて、鼻（はな）を粥（かゆ）の中（中）へ（へ）落した話は、当時

京都（を）まで（まで）喧伝（けんでん）された。――（けれども）これは内供に

とつて、決して鼻（の）に（を）苦（く）に病（や）んだ重（おも）な理由ではない。内供

と（と）は（は）実にこの鼻（と）に（に）よつて傷（きず）つけられる自尊心（じそんしん）は（は）た

めに苦（くる）しんだのである。

池の尾の町の者（を）は（は）、こう云う鼻（を）が（が）している（ぜんちないぐ）禪智内

供のために、内供（の）も（も）俗（ぞく）でない事（を）と（と）仕合せ（しあわせ）だと云つ

た。あの鼻では誰（だれ）も妻（つま）に（に）なる女（を）が（が）あるまいと思つた

からである。中には（また）でも（でも）、あの鼻だから出家（しゅっけ）したのだろ